

病院の実力

九州・山口編

適切なりハビリで長持ち

寛骨臼の形成不全などによるものだ。

前股関節症、初期、進行期、末期と4段階で進行していく。初期は、理学療法士の指導の下、運動療法などの保存療法で痛みの軽減を図る。進行期・末期には、保存療法を

続けながら、人工関節置換術などの手術も視野に入れる。

人工関節置換術は、傷んだ関節を取り除き、人工関節を入れる。多くの場合、日常生活や軽いスポーツもできるようになる。正確な位置に入れためのコンピューター支援手術「ナビゲーションシステム」を導入する施設も増えている。

「メニューはオーダーメイド。リハビリの習慣化で、股関節への負担を減らせる」と語るのは同センターの松山裕・副センター長。現在は39人いる理学療法士のうちの1人で、作業療法士15人、管理栄養士3人とともに筋力アップなどを促したり、食事療法による体重管理を指導したりする。

早期に見つかれば治療の選択肢も広がる。痛みを我慢せずに専門医を受診することが大切だ。

整形外科専門医の浅山勲・センター長による

■リハビリの習慣化を

福岡県八女市の川崎病院では昨年、1754人が保存療

度だが、変形性股関節症では

体重を5、6キロ落とすことでも状態が和らぐ患者もいるが、加齢で骨が弱くなり、筋力も低下すると、悪化する可能性もある。浅山センター長は「100%完治させるというより、上手につきあい、定期的に診察を受けるのが望ましい」と話す。

法を受けた。関節症センターがある専門病院でありながら、かかりつけ医の役割も兼ねる。症状や体形、年齢などに応じたきめ細かなメニューで症状の悪化を防ぎ、股関節を長持ちさせることを目指している。

股関節は、骨盤の外側にあるくぼみ(寛骨臼)で、大腿骨の先端の丸い大腿骨頭を包み込む構造になっている。胴体と両足をつなぎ、体重を支えると同時に、足を前後左右、外側内側に回すなど多様な動きを行う。片足立ちの場合、体重の3~4倍の負荷がかかる。

股関節に痛みが出る病気で最も多いのは「変形性股関節症」だ。関節の軟骨がすり減り、炎症が生じる。発症年齢は40~50歳代が多い。日本人の場合、原因の8割以上は、

股関節の病気

取り上げる。日本股関節学会や日本人工関節学会の研修施設などに2019年の診療実績を調査した。

股関節は、骨盤の外側にあるくぼみ(寛骨臼)で、大腿骨の先端の丸い大腿骨頭を包み込む構造になっている。胴体と両足をつなぎ、体重を支えると同時に、足を前後左右、外側内側に回すなど多様な動きを行う。片足立ちの場合、体重の3~4倍の負荷がかかる。

股関節に痛みが出る病気で最も多いのは「変形性股関節症」だ。関節の軟骨がすり減り、炎症が生じる。発症年齢は40~50歳代が多い。日本人の場合、原因の8割以上は、

整形外科専門医の浅山勲・センター長による

■リハビリの習慣化を

福岡県八女市の川崎病院では昨年、1754人が保存療

度だが、変形性股関節症では